



✿ アンコール遺跡群での共同研究と西トップ寺院の発掘調査



カンボジア国旗

国旗の中央に世界遺産が描かれている国、それがカンボジアです。カンボジア国旗は政治体制の変化にともなって、その都度作り替え

られましたが、常に描かれているのが世界遺産・アンコール・ワットです。

カンボジアでは9～15世紀にクメール王朝が繁栄します。アンコール・ワットは、その最盛期であった12世紀中頃（日本でいえば平安時代の末期）の王の墓です。クメール王朝滅亡後は、アンコール・ワットはわずかに地域の住民によって、その存在が知られるだけでしたが、1858年にフランスの学者アンリ・ムオーに「発見」されてから、世界にその名が知られるようになったのです。そしてカンボジア統合の象徴ともなったのです。このアンコール・ワットを中心とするアンコール遺跡群は、カンボジア内戦終結後の1992年に世界遺産に指定され、同時に危機に瀕した世界遺産リストにも掲載されました。そして、世界各国の研究チームによる国際的な保存修復が進められてきたのです。日本からも早稲田大学を中心とした日本国政府アンコール遺跡救済チームや、上智大学を中心とした国際調査団が、現



西トップ寺院での共同発掘（2003年8月）

地で活発な活動をおこなっています。

文化庁は1993年にアンコール遺跡の保護を目的とした共同研究事業を発足させ、実際の事業実施を私たち奈良文化財研究所が担うことになりました。当初は早稲田大学や上智大学など先行調査隊の協力によって、12世紀末の中規模なヒンドゥー教寺院バンテアイ・クデイでの遺構探査や当時の日常用陶器を製作していたタニ窯跡群の発掘調査をおこなってきました。

昨年度からは独自のフィールドとして、アンコール・トム内の小寺院、西トップ寺院を選び共同研究をおこなうことになりました。アンコール・トムは、クメール王朝の王宮を中心とした都城で、3km四方、濠と城壁で囲まれた壮大なものでした。私たちは、昨年度に現地文化財保護機関であるアプサラとの覚書に調印、2005年度までの4年間で第1期計画期間としました。この共同研究は、考古学を含めた総合的な調査をおこない、この寺院の長い歴史を明らかにすることが第一の目標であり、同時にカンボジア側の人材育成に貢献することも目指しています。

本格的な調査活動を開始したのは今年度になってからで、8月下旬に最初の発掘調査をおこないました。今回の調査では、遺跡全体の基礎構築の様子を知るため、伽藍南半部に東西3m、長さ11mの調査区を設定。調査の結果、中央祠堂から東へ延びるテラスと伽藍を囲むラテライト石列は、14世紀以降の中世期のほぼ同時に構築されたものであることが明らかになりました。しかし、中央祠堂に関する基礎構造が把握できなかったため、今回は中央祠堂に近いところで調査をおこなう計画です。

文化遺産の保存や調査に関する国際共同事業には、それなりの困難や苦勞をとまいません。そうしたなか、緻密な調査とともに現地の人材育成に重点を置いた私たちの取り組みは、高く評価されるものと自負しています。 （飛鳥資料館 杉山 洋）

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東南隅（飛鳥藤原第 128 次）

藤原宮の中核、大極殿の南方には、瓦葺きの朝堂院が東西対称に 12 棟ならぶ朝堂院が広がっています。朝堂院は、国家的な儀式や政務・饗宴の場で、その南には、朝堂院に入る臣下が待機する朝集殿院がありました。これまでの調査で、朝堂院は複廊という回廊で区画されていたことがわかっています。本調査ではその東南隅を発掘し、朝集殿院の区画施設との取りつき方を明らかにすることを目的としました。調査面積は約 32 m 四方（1024 m²）、4 月 1 日から開始し、7 月 25 日に終了しました。

調査では、ほぼ想定通りの位置に朝堂院の回廊を検出しました。東面回廊が北からのびて、調査区中央付近で西に折れ、この南面回廊が西方に続いてゆきます。回廊は複廊ですから、3 列の礎石据付穴・抜取穴がずらりと並ぶはずなのですが、わずかに根石を残す穴があるものの、総じて残存状況はよくありません。東面回廊に至っては、南面回廊との重複部分を除くと、全 9 個の穴のうち 3 個しか発見できませんでした。ちなみに柱間寸法は、桁行（長手）が約 4.2 m、梁行（短手）が約 3.0 m です。

いっぽう、朝集殿院の東側区画施設は複廊であることが判明しました。ところが、朝堂院の東面回廊



調査区の全景 奥は耳成山（南から）

を延長させた位置でなく、3 m ほど西にずれています。すなわち、朝集殿院回廊の東側柱筋が、朝堂院回廊の棟通りに合うのです。しかも、柱間寸法は桁行が 3.0 m、梁行が 3.6 m で、取りつき部分はやや複雑になっています。どうしてこのような形になったのか？ 調査の終盤にある手がかりを発見しました。朝集殿院の区画施設は、掘立柱塀から回廊に建て替えられているのです。回廊東側柱筋の柱位置は、掘立柱塀の柱位置をまったく踏襲していました。つまり、掘立柱塀は朝堂院回廊の棟通りに合わせていたのです。回廊の建設にあたっては、とりつき部の複雑さよりも、柱位置を踏襲することが重要だったようなのです。

以前の調査成果とあわせると、朝堂院の規模は、東西 233.5 m、南北 321.3 m となることがわかりました。以前から言われていましたが、この規模は古代宮都の中では最も大きいものです。本調査で、朝堂院の規模がこれまで以上に明確になったことは、藤原宮中核部の設計法、さらには 12 棟の朝堂の配置法などを解明するのに、大きな手がかりを得たといえるでしょう。また、朝集殿院区画施設の建て替えの事実は、藤原宮中核部で確認した初めての改作痕跡であり、16 年と短命だった藤原宮の造営を考えるうえで、きわめて重要です。

もうひとつ重要な遺構があります。朝堂院の東側には幅約 2 m の南北の素掘溝があります。朝堂院回廊南端付近から南にはなく、水はその位置で東から注ぎ込んで北へ流れていくようです。埋土は大きく 3 層に分かれており、その 2 層目からは木簡が出土しました。なかには「大寶三年」、つまり西暦 703 年にあたるものがあります。そのほか小木片や檜皮などもあり、これらの木簡・木製品は、なんらかの



本簡の出土した溝（北から）

造営にともなう遺物と見てよさそうです。一緒に出土した瓦や土器などを今後検討し、溝の性格や藤原宮造営の様相などをじっくり考えていかなければならないと考えています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎和久）

第一次大極殿院南面築地回廊（平城第 360 次）

奈良時代の前半、平城宮の正門である朱雀門の真北に、第一次大極殿が存在していました。大極殿は、天皇即位や朝賀、外国使の謁見など、もっとも重要な国家的儀式が行われた建物です。第一次大極殿は、東西 178 m、南北 318 m におよぶ、築地回廊という区画施設で囲まれており、その区画内部を第一次大極殿院と称しています。奈良時代後半には、大極殿の機能は東の地区へ移り、大極殿院の建物は解体されました。そののち、この地区は別の宮殿として整備され、さらに平安時代初めには平城太上天皇の居所として用いられたと推測されています。

今回の調査は、第一次大極殿を取り囲む築地回廊のうち、平城第 296 次（1998 年度）と平城第 337 次（2001～02 年度）との両調査区にはさまれた、南面築地回廊の西南部分を対象としました。その目的は、第一次大極殿院南辺地区の奈良時代前半から後半にかけての変遷過程を明らかにすることにあります。調査は 7 月 2 日から開始し、9 月末現在ほぼ終了しています。8 月 23 日には、現地説明会を開催しました。残暑の厳しい折、高校野球の決勝戦当日という悪条件？にもかかわらず、400 名もの方に現場をみていただきました。

今回の調査で明らかにされた点は、次の 3 点です。

第 1 は、南面築地回廊の柱位置が推定通りの位置に確認されたことです。今回の調査により南面築地回廊のほぼ全面について調査が完了しましたが、これまでの調査成果をあらためて確認することができました。

第 2 は、南面築地回廊が解体された後のこの地区の変遷が明らかになったことです。奈良時代後半、解体された南面築地回廊の北側は、これまでの見解通り礫敷の広場であることが確認できました。それとともに、同じ頃、回廊基壇の南側にも礫が敷かれていた可能性が高まりました。加えて、奈良時代前半のものと思われる築地回廊南雨落溝と礫敷が、奈良時代後半に敷かれた礫敷の下層でみつかりました。

第 3 は、少なくとも 3 時期にわたる、築地回廊北雨落溝を検出したことです。上層・下層の雨落溝はこれまでの調査所見をあらためて確認するものでしたが、中層の礫溝は、東西に見切り石をならべ、その南側（回廊基壇側）に石を敷き詰めた遺構で、南面回廊でははじめて確認されました。北雨落溝の遺

構とその北側に敷かれた内庭部分の礫敷との関係や、これらの遺構が第一次大極殿院地区の変遷のどの時期に対応するものかは、今後の検討にまきたいと思います。

翻って鑑みるに、第一次大極殿院地区は、宮の中核部分として、研究所により集中的に調査対象とされてきた地区の一つでした。今回の調査はこれまでの調査成果とそこで呈示された課題に導かれながら、若干の知見を加えたものといえます。一方、新たな課題も生じています。一例をあげれば、築地回廊の内側に広がる内庭部分の変遷・構造と機能にかんする問題です。その解明は、近年の古代史研究の動向ともかわり、興味深い論点を提出すると思われま

（平城宮跡発掘調査部 山本 崇）



平城第 360 次調査区全景（北東から）



現地説明会の様子



1 6276Aa (原寸)
直径18cm



2 6276Ab



3 6276Ac (原寸)
直径18cm

顔は変われど^{はん}範は変わらず

掲載した軒丸瓦は本薬師寺出土品です。1は端整な複弁蓮華紋軒丸瓦。3はいびつな細弁蓮華紋軒丸瓦。この両者、一見すると似ても似つかないが実は同範なのです。瓦の範（紋様をつけるための木型）は使い続けると摩耗するため彫り直しをします。ここに掲載した瓦も例にもれません。まず、1の範を2のように彫り直します。2では内側の圏線と弁・間弁の先端が一体化し、外側の圏線がなくなっています。次に、これを3のように彫り直します。このように範を彫り直すと瓦当紋様は変わります。しかし、範割れによって生じた傷は消えずに残ります。いくら範を彫り直しても傷はなかなか隠せません。完璧な整形手術は難しいものです。

ここで紹介した瓦や飛鳥・藤原地域の寺院や宮殿から出土した瓦は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の展示室に展示してあります。是非、実物をご覧ください。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 小谷徳彦)

✿ ベトナム・ドンラム村集落保存計画

建造物研究室では、今年度より3年間の計画で、文化庁による国際協力事業への協力及び昭和女子大学との共同研究として、ベトナム北部の集落保存計画策定調査をおこなっています。でも、なぜ奈文研がベトナムなのでしょうか。

奈文研では、日本各地の歴史的町並みの調査を昭和40年代から続けており、近年でも高山市、榑川村と、継続的に調査をおこなっています。ベトナムの集落保存計画調査は、この日本での蓄積を活かす格好の機会となります。我々が調査・研究の対象としているドンラム村モンフー集落は、首都ハノイの近郊、ハタイ省の一集落で、伝統的な集落形態を完全に残した、貴重な存在です。集落内の建物はどれも似た造りで、手探りでわずかな違いを探していくこととなりますが、ベトナムには民家についての体系的な研究が存在していないため、この調査には、対象に正面からぶつかって民家史と集落・都市史を一から立ち上げていくような開拓感があります。

それだけではありません。ベトナムの民家は、東アジア木造建築の本質的な意味について考えさせてくれるものでもあるのです。ベトナムの民家は、梁の組み方に独自の形式を持ちながらも、その基本は中国建築と共通しています。モンフー集落内に現在残っている民家はほとんどが19世紀以降に建てられた比較的新し

いものですが、その形式の素朴さゆえにむしろ古い中国建築の姿を伝えているように思わせるものがあります。その建築は、例えば入母屋屋根を持つ建物の場合、日本では隅の間を正方形にするのが一般的であるのに対し、桁行と梁間を違えたまま組み上げたりしています。このような違いをまのあたりにすると、屋根形式と構造との関係について抱いている常識に再考を迫るような、言いしれぬ力強さを感じさせられます。

こうした考察は、われわれが日本の古代建築について研究する際の姿勢と似ています。古代建築は、建築を成り立たせる個々の基本要素について、根源に立ち返って問い直すことのできる素材だからです。ベトナムの民家、集落の調査は、そんな、奈文研が果たすべき建築史研究への貢献の延長上にあるものだと考えています。
(文化遺産研究部 清水重敦)



ドンラム村モンフー集落の路地

吉備池廃寺発掘調査報告の刊行

奈良文化財研究所がおこなった発掘調査には、近年、世間の注目を集めたものが少なくありません。吉備池廃寺もそのひとつです。

この遺跡は、当初、瓦窯跡と推定されていましたが、1997年から5年間にわたる調査で、飛鳥時代の大規模な寺院跡であることがわかりました。巨大な金堂と塔を東西に並べた伽藍配置としては、最古の例となります。

堂塔や伽藍の規模は、同時代の国内寺院をはるかにしのぎ、新羅の皇龍寺や藤原京の大官大寺に比肩します。そこで、639年に舒明天皇が創建した最初の勅願寺「百濟大寺」の跡と目されることになりました。瓦をはじめとする遺物の年代や出土状況も、そうした想定を裏づけています。

各年度の発掘調査の概要については、奈文研年報・奈文研紀要で公表してきましたが、このたび、一連の調査の正式報告が刊行の運びとなりました。これを基礎資料として、今後の研究がいつそう進展するものと期待されます。

なお、本書は、『大和 吉備池廃寺』という書名で吉川弘文館から市販されています(A4判、上製、箱入り、274頁、図版72頁、税別9500円)。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 小澤 毅)



埋蔵文化財センターの活動

発掘技術者研修の意義と展望

埋蔵文化財センターが設置されたのは1974年4月11日、日本が高度経済成長の道を歩んでいる時でもありました。当センターが奈良文化財研究所に設置された理由は、文化庁の付属機関のなかでは唯一埋蔵文化財の調査研究を担当している機関であるとともに、既に1966年度以降、埋蔵文化財発掘技術者研修を毎年実施していた実績があったからです。さらに飛鳥・藤原・平城地域等の発掘調査を継続実施しており、研修や技術開発のフィールドを確保しうる点、設置後当センター職員が発掘調査研究の現場に絶えず接触しうる点などが考慮されてのことでした。当センターの具体的な役割として、次の4点を挙げることができます。

- (1) 地方公共団体のおこなう埋蔵文化財調査に関する専門的な指導助言
- (2) 地方公共団体のおこなう埋蔵文化財調査の専門職員等に対する研修
- (3) 埋蔵文化財に関する情報資料の収集整理提供
- (4) 埋蔵文化財調査技術の開発

なかでも(2)の研修事業には、特に力を入れて実施しております。

発足当初、埋蔵文化財センターの主要な事業の一つであった発掘技術者研修は、一般研修2回にとどまっていたのですが、1982年度には年間11課程、受講者数258人、延べ257日に、ピーク時の1992年度には発掘技術者研修の年間受講者数が473人に及ぶようになりました。その後、バブル経済が崩壊したことによって、全国的に開発行為そのものが減少の一途



保存科学課程の実習風景

をたどり、埋蔵文化財をとりまく環境が大きく様変わりしてきました。しかし、世間の埋蔵文化財行政に対する関心は依然として高いものがあり、当センターとしても埋蔵文化財の保護と調査技術の世界水準を目指していくための研修事業に益々力を入れているところであります。

2003年度の研修課程は、開講当初から実施してきた一般研修の他に、専門研修を8課程(写真基礎・保存科学・文化財写真・古代集落遺跡調査・遺跡環境調査・官衙遺跡調査・報告書作成・城郭遺跡調査)、特別研修を5課程(科学分析調査・遺跡地図情報・自然科学的年代決定法・陶磁器調査・動物考古学)、合計14課程を組んでいます。どの課程も第一線で活躍している講師陣をそろえ、研修内容の充実を図っています。カリキュラムも世の中の動向を敏感に反映する内容を取り入れ、研修生に質の高い研修を提供することにスタッフ一同腐心しています。また、参加される研修生の方々にとっては、全国各地の文化財行政の情報交換や人的ネットワークの構築には恰好の場といえるのではないのでしょうか。埋蔵文化財を視野に入れた地域活性の担い手として、是非、埋蔵文化財センター主催の発掘技術者研修の門をたたかれることを強く望みます。

(埋蔵文化財センター長 田辺征夫)

記 録

平城第360次(第一次大極殿院南築地回廊)発掘調査現地説明会

日 時：平成15年8月23日(土)15時30分～
報告者：平城宮跡発掘調査部 山本 崇 技官

埋蔵文化財発掘技術者研修

文化財写真課程専門研修：8月19日～9月12日 7名
科学分析調査課程特別研修：9月17日～9月19日 17名
国際講演会(関西元気文化圏参加事業)

奈文研国際研究 - アジアの考古学シリーズ - 第1回

日 時：平成15年9月27日(土)13時30分～
場 所：奈良県歯科医師会館講堂(奈文研西隣)

「唐長安城の発掘調査と研究」

中国社会科学院考古研究所研究員 安 家瑤

「唐大明宮太液池2003年春季の発掘調査成果」

中国社会科学院考古研究所副研究員 龔 国強

「広州南越国の王宮宮署遺跡の新発見」

中国社会科学院考古研究所副研究員 劉 瑞

「古代城址と中国文明の起源」

中国社会科学院考古研究所副研究員 繆 雅娟

飛鳥資料館のみどころ (2)

秋期特別展「古年輪」

飛鳥資料館では、毎年春と秋の2回、特別展示をおこなっています。今年度の春期特別展は「ASUKA 1/500」と題して、昨年度全国を巡回した「飛鳥・藤原京展」の帰還展を開催しましたが、秋期特別展は「古年輪」と題して、前号でも紹介した年輪年代法に関する展示を10月7日(火)から11月24日(月)の期間(会期中無休)で開催します。

当研究所で古年輪から年代を読み取る年輪年代法の研究が始まったのは、今から23年前のことです。現代の伐採木から近世、中世、古代の建築部材、さらに遺跡から出土する考古遺物の木材の年輪を読み取る地道な作業により膨大なデータが蓄積され、それを解析する研究が続けられました。その結果、今ではヒノキで、現在から約3000年前までの暦年標準パターン(年代を割り出す基準パターン)が作り上げられています。

完成したこの年輪の暦年が正確であることは、滋賀県信楽町の宮町遺跡出土柱根の年輪から読み

取った柱の伐採年代が、『続日本紀』に記す紫香楽宮の造営年代と一致したことから実証され、その後の多くの応用事例からその信頼性はゆるぎないものとなっています。

近年、年輪年代法の成果は、マスコミなどで華々しく取り上げられる機会も増えてきましたが、研究の歴史や方法など、その全体像については、まだまだ一般に理解されているとは言えません。秋期特別展では「古年輪」をテーマに、遺跡、古寺の部材資料とともに、その最新の研究成果を広く紹介します。また、特別講演会を下記日程にて開催しますので、あわせてご来聴いただければ幸いです。
(飛鳥資料館 西山和宏)

<特別講演会>

10月18日(土)午後2時より 飛鳥資料館講堂
「古寺の年輪」

元奈良国立文化財研究所長 鈴木嘉吉

11月1日(土)午後2時より 飛鳥資料館講堂
「年輪の暦」

埋蔵文化財センター古環境研究室長 光谷拓実

お知らせ

平城宮をパソコンで検索! クイズにも挑戦!

平城宮跡資料館では、平城宮の発掘調査・研究の成果を、パソコンでも検索できるようになりました。「散策モード」「資料図鑑モード」「年表モード」など、豊富なメニューから、最新の情報を検索できます。また新たに制作した「平城京の概要 - 奈良文化財研究所の活動と成果 - 」、「発掘が明かす古代の真実 - 式部省・兵部省・造酒司 - 」を加え、合計10本になったビデオライブラリーでは、奈文研による40年余の発掘調査研究の成果をご覧いただけます。パソコン検索では、平城宮にかんするクイズも用意してあります。あなたも挑戦してみませんか!



パソコンで平城宮を学ぶ

国際講演会(関西元気文化圏参加事業)

奈文研国際研究 - アジアの考古学シリーズ -

第2回:平成15年10月18日(土)13時30分~

場所:奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂

(第3回~第4回の会場も同じ)

「近年における河南重要考古発見」

中国河南省文物考古研究所副所長 張 志清

「鞏義黃治唐三彩窯の発掘調査成果」

中国河南省文物考古研究所副研究員 郭 木森

第3回:平成15年11月1日(土)13時30分~

「アンコール遺跡の保存と活用分野における日本・カンボジアの協力について」

シェムリアップ州遺跡保護開発機構総裁

ブン・ナリット

「アンコール歴史公園内の住民と村落」

シェムリアップ州遺跡保護開発機構文化局長

アン・チュリアン

「アンコール・ワット環境教育プロジェクト」

上智大学教授

石澤良昭

第4回:平成15年11月16日(日)13時30分~

「中国朝陽北塔修復」

中国遼寧省文物考古研究所所長

王 晶辰

「中国北朝の瓦と飛鳥の古瓦」

奈良文化財研究所協力調整官

毛利光俊彦

<講演会>

平成15年11月8日(土)13時30分~

「古代建築の復原」

元奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉

平城宮跡資料館講堂

(NPO平城宮跡サポートネットワーク主催)

「奈良の都を掘る - 発掘速報展 平城2003 - 」

(11月1日~21日)開催 場所:平城宮跡資料館

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2003年9月